

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

かつて、大学闘争が終了したあとの大学のキャンパスには、〈ことば〉がまさに失われた状況が存在した。ひとと出会っても◎そこには気まずい沈黙が存在した。半年間も誰とも一言も口をきかなかつたという友人もいた。妙な雰囲気の中で、ぼくは何人かの友人たちと「総合文化研究会」なるサークルをでっちあげた。在学中の大学では、自治会は解体していたから、どのサークルがどこの部屋を使うというような規則はなきに等しく、とりあえず、あいている部屋を強引に占拠してしまった。(中略)

そして、総合文化研究会はスタートした。会員の規則は特になく、とりあえずいくらかを払って資金をプールした。この資金は、何のためのものかといえは、マンガ週刊誌と雑誌を買うためのものなのだった。映画、文学、マンガなどあらゆる文化を対象とするとうたいながら、実際ここでは何もなされなかつた。暇があると、皆が◎そこ¹に集まり、マンガ週刊誌を読んだり、社会問題について議論したり、映画の話をしたりした。入ってくる者はこぼまなかつたが、出てゆくのは自由だった。メンバー集めもそれほど積極的ではなかつた。メンバーの考え方も一様ではなかつたし、何も強制することはなかつた。ただそこで出会ってしゃべるといふ空間が設定されたことだけが重要なことだったのだと思う。サークルの存続などはどうでもいいことだった。おそらく、ぼくらが大学を卒業したあとは、徐々に消滅したのではないかと思う。

たしかにあそこには開放された空間、Aの空間が一時的につくりだされたのだ、と今にして思う。こういうことを考えてゆくと、「野球ヤジ研究会」、「お月見愛好会」などといった奇妙な大学サークルの氾濫も、また、ある種の退行の場、甘えの場の提供という意味あいをもっているのかもしれない。「三人寄ればサークル」の時代というのは、1と見ることもできるだろう。むろん、それが退行のままに終わっている若者たちも多いのだろうし、さらに問題なのは、こうした2性の大きいサークルのなかにも入れず、孤立している若者たちの数も多いということだ。

結局、われわれの社会が、2性の大きい「甘え」の場としての「3」を崩壊させているだけでなく、かつて存在した若者宿のネドオヤという疑似的な親である年長者の存在、あるいは仲間集団というものを崩壊させ続けてきたということに大きな問題があるといえるのだろう。

ともあれ、われわれの社会が、逃げ場という許容空間を次第に奪いつつあるということだけはたしかなことなのである。逃げ場を失って、Bのなかに入ることには失敗すれば、ひとは暴力の渦のなかにおのれをなげだすことになる。せめて、社会空間の暴力化をこれ以上避けるために、何とか逃げ場という空間を、子どもや若者たちのために確保すべく、考えることこそ、浅薄な若者批判をすることより、大人たちが考えるべきことではないのだろうか。

ともあれ、〈ことば〉の回路を徐々にでも生みだしてゆく〈場〉こそ、われわれの社会で今もつとも切実に必要なものなのだ、ということを指摘することで、ぼくは、ひとまずこの〈物語〉をしめくくることにしたいと思う。

問一 [A]・[B]のそれぞれを埋めるのに適当な語を三文字以内で答えなさい。

問二 [1]を埋めるのに適当なものを次から選び記号で答えなさい。

ア 無目的・無計画な寄り合い世帯的な現象

イ 少人数でも何か目的性・計画性のある方向を発見できればという現象

ウ 大学に入って初めて依存欲求をなにかのかたちで求めたあげくの現象

エ おいつめられた状況のなかから、ただただ脱出したいという欲求が吹き出した現象

問三 [2]・[3]を埋めるのに適当な語をそれぞれ次の中から選び記号で答えなさい。

2 ア 許容 イ 退行 ウ 消滅

エ 拡散 オ 縮小

3 ア 社会 イ 大学 ウ 家

エ 親 オ 友

問四 二重線部④・⑥の指示内容を答えなさい。

問五 波線部について。

① 「へ」とばへへの回路」をわかりやすく三十字以内で説明しなさい。(句読点含む)

② 波線部で言っている「場」の身近な例を、それぞれ五字以内で二つ答えなさい。

二 次の傍線部のカタカナを漢字に漢字をひらがなに直しなさい。

① コンギョウに出発する ② ハチマキを締める ③ コウキユウ平和を願う

④ チュウシンより祝う ⑤ アイボの情 ⑥ コタンの境地だ

⑦ ジゼン活動をする ⑧ ケンショウに応募する ⑨ スモウを観戦する

⑩ 公金をカイトイする ⑪ コショウ調査を実施 ⑫ チョウカを競う

⑬ 父は官吏であった ⑭ 首肯をしかねる ⑮ プロに匹敵する

⑯ 祭りの宵宮 ⑰ 戯曲を演奏する